

<雨にも負ける風にも負ける>

二日酔いだけならなんとかなる。走って汗を出し、水をたくさん飲んでいけば、午後には絶好調になることだってある。しかし、これに雨と風が加わると話は別だ。更に、寒さが追い打ちをかければ、もう絶望というしかない。そんな一日だった。

4:00 に起床、猛烈な二日酔いだ。調子に乗り過ぎた。この不快感、何度こんなことを繰り返せば懲りるのか。後悔ではなく、前悔ということができれば人間は成長するのに。酒に関しては、全く進化していない。性懲りの無さではトップクラスだ、と豪語できる。なんのこっちゃ？

5:00 に玄関を出ると、ポツポツと雨が落ちていた。国道 42 号上の温度計は 5.0 度だ。寒い。コンビニを見つけ、トイレでヒートテックアンシャツ(パールイズミ)を重ね着した。その上に、ハーフジャージと一枚生地のウインドブレーカー。下は、ランショーツ、タイツにブレーカーパンツだ。ブレーカー上下は、黒地にホワイトとピンクのライン入りで軽快だ。

バックパックは、今秋より 120 容量ののに換えた。コンパクトだが、補助袋付属で相当量入る。前のは、底が擦り切れて使い物にならなくなった。たった 3 回のジャーニーに使っただけなのに、大変な消耗である。

ウインドブレーカーもバックパックも、ナガオカスポーツ調達だ。私の装備が、だんだんナガオカスポーツ商品に染まっていく。そうでないものは、アンシャツとランショーツだけだ。私は、ナガオカスポーツの広告塔と言ってもよいかも。その内、スポンサー契約をしようか知らん。その時は、「大分ナガオカスポーツ」と描かれた幟を背負って走るぞ。

周参見に別れを告げると、急に風雨が強くなった。胸がムカつき始め、思い切って側溝にゲロをぶち撒いた。これで少しは気分が良くなり、民家の軒先を借りてカッパを着た。上は 5 枚着込んだことになる。

どうにかこうにか走れる状態になりよちよち進むが、更に雨脚が強まる。横殴りの雨には、簡易カッパでは対抗できず、フードが煽られて首筋から雨が侵入し始めた。これはいかん、と次のコンビニですかさず傘を買った。

傘を差しての走りなんてどだい無理で、早くも歩きが多くなる。幸い、周参見からの 16km ほどには 300m～1500m のトンネルが 10 箇所あり、その中は温かく風もないので、しっかりと走れた。

熊野街道大辺路最後のトンネルを抜けて下って行くと、突然、白亜の高層ビルが 2 つニョキニョキと現れた。南紀椿温泉だ。時刻は 7:30 で、やっと空が白み始めたところだ。10km 先に有名な白浜温泉があるから、ここは、その隠れ家的存在だ。2 つの高層ビルはリゾートマンションで、バブル期の遺産だろう。空室が目立つ。エントランスの片隅で、しばらく雨宿りをさせてもらった。

白浜町富田橋～郵便橋でのことだった。ボサーっとした瞬間、飛ばして来たダンプに傘を持っていかれたのだ。道は富田川沿いの土手の上であり、傘は遥か下の田んぼに飛んでいった。下り場もなく、諦めざるをえなかった。

運よく 1km 程先にローソンがあり、再び傘を手に入れた。今度は、先ほどの二の舞は踏めない。向かってくる大型に対して、傘を少し窄めて直角に立てる。脇を締めて、腰を落としたりやり過す。路面の水がバッシャッと飛んで来る。この格闘が、郵便橋を渡るまで続いた。

郵便橋を渡り右折する。真っすぐ行けば白浜温泉だ。温泉に浸かって温まれば寒さなんか吹っ飛ぶのに、という誘惑に駆られるが、「ここはいかん、まだ 10:00 じゃねえか」と言い

聞かせる。

朝来という駅があったので小休止とした。駅舎は小奇麗で、トイレは洋式ウォッシュレットだ。ありがたや、ありがたや、靴下と小タオルを乾いたのと換えた。アンシャツは、カップのおかげで濡れていない。汗も少ししかかいていない。大丈夫だ。

5km 程行って、紀伊田辺市に入った。ここは、武蔵坊弁慶の生誕地とされている。またシラス漁が盛んで、それを使った「あがら井」が有名だ。食してみたかったが、残念ながらこれは後知識だ。

シラスとは主に鰯の稚魚で、2cm 程度の透き通った体をしたものを言う。取れたてを、釜茹でしてそのまま出荷したのを「シラス」、茹で上がったのを、2 時間程天日で干したものを「中干しシラス」、半日天日でよく干したものを「チリメン」と呼ぶそうだ。こちらでは全部チリメンと言うが、そうではなかったようだ。勉強になった。

田辺の街並みは、臼杵と似た風情があった。商店街は寂れていたが、舗道が広くアーケードが付いていたので、雨の日には助かる。諦め気分で散策した。

市街地を抜け、42 号と合流した直後に「めし屋」があった。ちょうど正午だし、大休止の昼メシとする。

私は「めし屋」が大好きで、適時に見つけたら必ず入る。気楽に入れ待たなくていい。10 分もあれば掻きこめるからだ。それに、ジャーニーラン中はやはり米だ。米の飯を腹に入れなければ元気がでない。大盛りの飯をガツガツと食らう。これさえできていれば元気印だ。

メニューは決まっている。大盛り飯、味噌汁、出汁巻き卵、漬物だ。この店はこれで¥420 だった。安い。ようやく二日酔いが醒めたようだ。

気を取り直して店を出た途端、再び風雨が強くなった。せっかく元気が出たのに、気が溷んでしまう。

二子浜という海水浴場のトイレで用を足し、妻と娘に状況を伝えた。返答は、異口同音に「適所でストップ」だった。家族がそう言うならやめようか、という気持ちが増してくる。もう、靴もタイツもビショビショだった。

みなべ町の入り口に、国民宿舎「みなべ温泉」があった。こういう日に限って、ここぞという所に温泉があるんだな。まるで、「苦しいことはやめて寄ってらっしゃい。温まって気持ちいいわよ！」と唆しているようなもんだ。その手にゃ乗るかい、まだ 13:00 だぜ。

3km はあろうかと思われる、みなべの防波堤遊歩道を進みつつ美しい小砂利の浜を眺める。今まで見てきたうちで、一番すばらしいのではなからうか。雨に煙る雄大な浜を黒潮が洗っていた。

その遊歩道が尽きると、標高 200m の山越えだ。ここで雨脚が、更に強まってきた。寒さも限界に達している。目の前に立ちはだかる山、強い風雨、寒さ。これだけ条件が揃えば、逆らってはいけない。ハイ！これま〜で〜よ〜だ。潔いではあーりませんかー。

来た道を 2km 程戻り、みなべ駅に到着。予備の着替はもうないので、トイレでアンシャツ、タイツ、ショーツ、靴下を脱いで搾った。とりあえずこれで悪寒は治まり、人心地がついた。

日高郡みなべ町は、紀州「南高梅」であまりにも名高い。日高郡だけで全国の 25% の梅を生産するが、その中心地はここである。完熟南高梅の梅干しを食べたら、他のには手を出したくなくなる。しかし高価だから、おいそれとは口に入らない。

南高梅の名前の由来は、戦後、ここの農協と南部高校園芸科とが協力し合って、現在の品種に改良したことにあるそうだ。すなわち、南部高校に因んで南高梅である。いい話だ。

14:30 の下り電車に乗り込んだ。ヒーターが効いており座席が温かい。沿線には南高梅の加工所が並んでいて、車窓から甘酸っぱい香りが漂い込んで来そうだった。駅前の直売所で

買い込んでおけばよかった、と悔やんだ。

御坊に着き、近くのビジネスホテルに向かう。雨は小降りになっているが、風は相変わらず強い。あのまま続けていたらどうなっていたことか。帰る交通手段が何も無い所で野垂れでいたら、と思うとゾットする。ここは自分の判断を肯定しておこう。

では晚餐に行こう。このホテルは駅前だが、繁華街から離れており近所に居酒屋はない。唯一あったのは、「花御坊」というレストランだった。ファミレスではなく、ちゃんとしたレストランだ。

ジャーニーを何度も経験すると、居酒屋や焼肉屋に一人で入るのには慣れたが、レストランに一人で、しかもジャージ姿で入るのは気が引けた。しかし、腹ペコには勝てなかった。

注文は、イベリコ豚のシャキシャキ鍋にした。¥2500 で、南高梅の梅酢を使ったカルパッチョ、生肉の握り寿司、そして鍋といったコースだ。イベリコ豚は初めてだが、生で食べられるとはね。トロっとしてあっさりして美味だった。鍋も、汁具共にうまくてラードがしつこくなく、最後にはご飯をもらってぶっかけて食べた。汁を一滴も残さなかった。

アルコールはというと、何と生ビール一杯しか飲まなかったのだ。やはり、私も人の子だった。明日はやらなくては、と…。

ホテルに帰り、今日一日を振り返る。不本意ながら、みなべ～御坊間を 25km 程残したが、これは、「来年もまた和歌山に来い」ということではないのか。そう考えよう。気が楽になる。「よっしゃあ！和歌山大好き、来年も来るで!!」とベッドの上で氣勢をあげまくる重戦車であった。